

令和 3 年 5 月 30 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02583

研究課題名(和文)アルヌール・グレバン作『受難の聖史劇』における韻文構造上の諸原理の継承と発展

研究課題名(英文)The transmission and development of the principles of verse composition in Arnoul Greban's Mystere de la Passion

研究代表者

黒岩 卓 (KUROIWA, Taku)

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：70569904

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題の目的は、アルヌール・グレバン作『受難の聖史劇』の聖史劇発展上の位置づけを、とくに韻文構造の諸相に注目しつつ明らかにすることである。同作品の「第一日目」の諸写本を転写した上で、とくにキリスト誕生のシーンを例にとりつつ先行作品である『アラス受難劇』と比較した。結果として、『受難の聖史劇』が当時の神学や詩作技巧の文化的コンテクストを踏まえつつ、より親しみやすく受け入れやすい形でイエス・キリストの姿を表現していること、そしてその表現がその後の約一世紀間にわたって、大きな修正を受けることなく印刷本版聖史劇でも採用されつづけたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アルヌール・グレバンの『受難の聖史劇』は、西欧の文学史・演劇史などでも有名な作品ではあるが、その実際の姿はとくに日本ではあまり知られていないといつてよい。本研究課題によって、この作品の画期的な点、さらに中世末からルネサンスにいたるまでのこの作品の受容のありさまの一端を明らかにした。さらに、『受難の聖史劇』ほか中世フランス文学を日本にとり入れるにあたって重要な役割を果たした、戦前・戦中・戦後の仏文学者の業績を再検証することを通して、近現代の日本における西洋文化受容の変遷を分析した。

研究成果の概要(英文)：This research aims to clarify the status of Arnoul Greban's Mystere de la Passion in the history of the development of French mystery plays, particularly from the perspective of the use of versification. We transcribed and studied this work's manuscripts ("Premiere Journee") and compared its Nativity scene to the one from Eustache Deschamps's Passion d'Arras. We showed that the author tried to describe the figure of Jesus Christ as more familiar and accessible to the public. At the same time, he took the theology and the cultural context of verse composition into account more than his predecessor had done. We also showed that several printed adaptations introduced the Nativity scene of Greban's work with slight modifications even almost a century after its initial composition.

研究分野：フランス文学

キーワード：仏文学 文献学 演劇学 詩作技巧 写本学 比較文学

1. 研究開始当初の背景

これまで研究代表者は十五世紀半ばに成立したアルヌール・グレバン作『受難の聖史劇』の詩作技巧の研究を続けてきた。その過程で、孤立詩行(周辺の詩行と韻を踏まない詩行)が『受難の聖史劇』のいくつかの写本において僅かしか現れないことを確認した。このことは『受難の聖史劇』が同時代の多くの劇テキストとは異なった権威を有しており、同作品の筆写が(どのような受容の仕方が想定されているのであれ)強いコントロールの下で行われたという可能性を示唆している。この可能性に鑑みて、『受難の聖史劇』という作品の持つ中世演劇史上の独自性が改めて検討されるべきだと考えられた。もちろん聖史劇発展史における同作品の独自性については、神学的・演劇的・文学的視点からの蓄積がとくに1990年代以降に行われてきている。しかし当時の劇テキスト制作における骨格ともいえる詩作技巧・韻文構造の問題については、二十世紀初頭のH・シャトランの研究以来、包括的な試みが未だ為されていない。ここから聖史劇の発展史における『受難の聖史劇』の独自性を、とくに韻文の構造やその状態に注目しつつ捉え直すという、本研究課題の着想が生まれたのである。その際に最も有力な参照項として考えられるのが、ユスタシュ・メルカデ作『アラス受難劇』である。『アラス受難劇』は『受難の聖史劇』が明らかにモデルとした先行作品であり、両作品の比較を行うことで、後者の特徴をより効果的な形で浮かび上がらせることができると研究代表者は考えた。

2. 研究の目的

十五世紀の劇作家・音楽家・神学者であるアルヌール・グレバン作『受難の聖史劇』を、その主要なモデルとなったユスタシュ・メルカデ作『アラス受難劇』を特に韻文構造の観点から比較し、聖史劇の成立史における前者の位置づけを検証する。両作品の比較としては神学的観点などからの蓄積があるが、本研究課題ではとくに詩作技巧が1)キリスト生誕といった主要テーマ、2)写本に見出されるト書きや注解などの欄外記述、3)聖書や聖書注解のパラフレーズと有していた関係に着目する。これら三つの比較軸を基として、メルカデの修辞原理をグレバンがいかに関承・発展させたのか、また後者の独自性とはどのようなものかを明らかにする。さらに申請者自身による写本転写を分析上の底本とすることで、両作品の既存の近代校訂版の文献学的再検討を行う。

3. 研究の方法

『アラス受難劇』と『受難の聖史劇』の転写を行い、それらのテキストを比較することで、後者のレトリックの独自性を作品の伝承過程を考慮に含めつつ明らかにする。比較の上では以下に図示する三つの軸を採用する。

1)これまで断片的に行ってきた『アラス受難劇』および『受難の聖史劇』における個別の詩形の用法や韻の用い方の比較をより大規模なものとし、「第一日目」の主要テーマである

キリスト生誕を演出するべく両作品においてどのような配慮が詩作技巧上で為されているかを検証する。またグレバンは一つ一つの詩形の使用法についてはメルカデの原理を受け継いでいるが、微妙に変形した詩形を導入したり、あるいは詩形を並置させる際にその組み合わせをより複雑なものにする傾向があることがこれまでの調査で分かっている。こうしたグレバンによるメルカデの原理の応用によってどのような効果もたらされているかをとくに示したい。

2) 各写本の産地および年代推定を改めて確認した上で、細密画の使用法や写本に現れる欄外記述(上演上の指示ないしは作品内容にかかわるフランス語・ラテン語による注解、何らかの演出を示唆する「鉤」印など)を検討する。その上で、それらの諸要素と韻文構造との関連を検証し、両作品の上演においてどのような複合的效果が期待されていたのかを示す。なお『アラス受難劇』の現存写本は読書用写本、『受難の聖史劇』諸写本の内の主要な対象としたIG写本は上演用写本という明らかな違いがあるため、このテーマの検討に際しては特に『受難の聖史劇』G写本以外の読書用写本も参照し、比較の結果を補正する。

3) 両作品における聖書と聖書注解のパラフレーズの存在を調査したうえで、それらパラフレーズと詩作技巧との間にどのような関連があるかを検討する。この作業を通じ、権威あるテキストを典拠としている箇所とそれ以外の箇所の間にはどのようなヒエラルキー関係が想定されているのか、また結果としてそれらのパラフレーズがどのように観客・読者に伝達されていたのかを検証する。

4) 海外の諸研究者との連携を行うに当たっては、フランス中世文学・演劇研究という従来の枠組みに、中世フランス文学・演劇の日本への輸入史あるいは日仏比較文学・比較演劇といった視点を組み入れることで、日仏の若手研究者を交えたよりダイナミックな交流・共同研究体制を作り上げていく。

4. 研究成果

1) 本研究課題における主要な課題である『受難の聖史劇』と『アラス受難劇』の「第一日目」の相違については、まず『アラス受難劇』の現存唯一の写本の転写、さらに『受難の聖史劇』の大多数の写本(断片であるIとJ、大きめの破損があったり読解が困難だったりするCとD以外の写本)の転写を完了した。その上でイエス・キリスト誕生のシーンを例にとり、両作品の内容・詩作技巧・欄外記述などを、聖書のほかトマス・アキナス『神学大全』や中世末の聖書注解を参照しつつ比較した。その結果として、『受難の聖史劇』が先行作品である『アラス受難劇』に比べて、詩作技巧の彫琢や音と光の演出により神の子の誕生をより大規模に演出する一方で、イエス・キリストの描写については一人の乳児としての側面を強調していることを明らかにした。さらに聖母マリアや聖ヨセフについても、『神学大全』により即した形で表現していることを示した。またこの『受難の聖史劇』のイエス・キリスト生誕のシーンが、15世紀後半の諸写本さらには16世紀のいくつかの印刷本版聖史劇において、大筋においては同じ形で継承されていることを確認することができた。これにより『受難の聖史劇』とその書法が、聖史劇史上において長期にわたる影響力を保っていたことを従来よりも詳細に確認することができた。

2) グレバンの『受難の聖史劇』の「第一日目」の諸写本を転写する過程で、各写本の特徴をより詳細に把握することができた。それだけでなく、これら写本のテキストに現れる孤立詩行(韻を踏まない詩行)を調査することで、同作品の伝承が、それがどのような聖俗のコンテキストで

筆写されたとしても、かなり入念な配慮のもとに筆写されていたことを確認することができた。このことから、『受難の聖史劇』が俗語作品でありながら大きな権威を持ったテキストとして伝承されていた可能性を改めて確認することができた。

3) 『受難の聖史劇』では、いずれの写本でも孤立詩行こそ現れないものの、伝統的な定型詩の形が順守されない箇所がある(幼児虐殺の場面のトリオレの使用)。このような定型詩からの逸脱は、その場面において何らかの強い感情が喚起されていることに連動していると考えられる。他方でそうした強い感情を、喜劇的作品に見られるような孤立詩行ではなく既存の定型詩からのズレによって表現しようとすることは、『受難の聖史劇』の修辞戦略の特徴を示していると考えられる。すなわち、どのような場合であっても非理性的な言説ではなく理性的な言説を通して読者・観客に働きかけようとする、という特徴である。

4) 副テーマとして中世フランス文学の日本における受容を辿り、とりわけ坂丈緒や佐藤輝夫といった仏文学者の業績について理解を深めることができた。その過程で、複数の仏文学者が多大な労力を払って翻訳した武勲詩『ローランの歌』の日本における受容の有様を辿ることを通じて、日本の近現代がどのように西洋文化を取り入れ、またそれぞれの時代の現実に合わせて咀嚼してきたのかを示す、という新たな研究の展望を得ることができた。(『ローランの歌』は戦争を主題とし、また日本の軍記物語を想起させる作品であったがゆえに、幕末から戦後の日本人にとってひととき強い意味を持つ作品であったと考えられる)。この新たに得た展望については、今後さらに検討を行いたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 黒岩卓	4. 巻 14
2. 論文標題 アルヌール・グレバン作『受難の聖史劇』におけるイエス・キリストの誕生 その書法と伝承	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Nord-Est (日本フランス語フランス文学会東北支部会報)	6. 最初と最後の頁 14-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 TAKU KUROIWA	4. 巻 -
2. 論文標題 Presence de la Chanson de Roland dans le Japon moderne : les premieres presentation et traductions (MAEDA, BAN, SATO)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Le Recueil Ouvert	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 黒岩卓	4. 巻 38
2. 論文標題 講演会報告：日本語からフランス語に翻訳すること（文学場・中世・近現代）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『フランス文学研究』（東北大学フランス語フランス文学会）	6. 最初と最後の頁 54-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 3件/うち国際学会 4件）

1. 発表者名 KUROIWA Taku
2. 発表標題 La versification des discours "scandaleux" dans les textes dramatiques francais (1450-1550) : le cas de la composition et de la transmission du Mystere de la Passion d'Arnoul Greban
3. 学会等名 Theatre et scandale (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KUROIWA Taku
2. 発表標題 The use of images in Japanese adaptations of the Song of Roland for children
3. 学会等名 Images, Philosophy, Communication (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Taku KUROIWA
2. 発表標題 The notion of the homeland in the Song of Roland and its Japanese translations - the case of the translation by Ban Takeo -
3. 学会等名 Furusato: 'home' at the nexus of politics, history, art, society, and self (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Taku KUROIWA
2. 発表標題 Le "meilleur" manuscrit du Mystere de la Passion d'Arnoul Greban pour le Japon d'aujourd'hui : (re)donner du sens aux etudes medievals au Japon du XXIe siecle
3. 学会等名 Moyen Age interdisciplinaire a Grenoble (MAiGRE) (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Taku KUROIWA
2. 発表標題 The analogical approach and its limit - around the presentation of the French medieval culture by Takeo Ban -
3. 学会等名 Les Valeurs de l'Autre (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Benoit Grevin
2. 発表標題 Traduire du japonais en francais (champ litteraire, Moyen Age et temps modernes). Quelques reflexions
3. 学会等名 Universite du Tohoku
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 黒岩卓
2. 発表標題 アルヌール・グレバン 『受難の聖史劇』 諸写本に見る様々な音楽
3. 学会等名 日本音楽学会・東日本支部研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 黒岩卓
2. 発表標題 アルヌール・グレバン作 『受難の聖史劇』 におけるイエス・キリストの誕生 その生成・書法・伝承
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会2020年度東北支部大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 KUROIWA Taku	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Mimesis International	5. 総ページ数 242 (pp. 183-194を執筆)
3. 書名 Furustato: 'Home' at the Nexus of History, Art, Society, and Self (部分執筆)	

1. 著者名 Taku KUROIWA	4. 発行年 2021年
2. 出版社 H. Champion	5. 総ページ数 (近日刊行)
3. 書名 Le Rondeau entre XIIIe et XVIe siecles. Une forme lyrique en liberte (部分執筆)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
	フランス	グルノーブル・アルプ大学	国立科学研究センター	